

Title	アクティブ・ラーニング研修（研究）会【聖学院大学 FD 委員会共催】 「新たな学習活動を引き出す教育手法：アクティブラーニングの技法と 学習課題の構造化」報告（2015 年度 聖学院大学総合研究所 アクティブ ラーニング研究会 主催）
Author(s)	長谷川, 恵美子
Citation	聖学院大学総合研究所 Newsletter, Vol.25No.1, 2015.9 :51-52
URL	http://serve.seigakuin-univ.ac.jp/reps/modules/xoonips/detail.php?item_id=5419
Rights	



聖学院学術情報発信システム : SERVE

SEigakuin Repository and academic archiVE

2015 年度 聖学院大学総合研究所 アクティブラーニング研究会 主催
 アクティブ・ラーニング研修（研究）会 【聖学院大学FD委員会共催】
 「新たな学習活動を引き出す教育手法～アクティブラーニングの技法と学習課題の構造化～」報告



発題者：小島佐恵子先生（上段右）
 司会：小川洋先生（下段左）

2015年7月13日（月）18時から19時半まで、聖学院大学総合研究所および、学部FD委員会の共催で、第1回アクティブラーニング研修（研究）会が行われた。今回は玉川大学教育学部教育学科の小島佐恵子先生をお招きし、「新たな学習活動を引き出す教育手法-アクティブ・ラーニングの技法と学習課題の構造化～」と題し、体験型講習会が行われ、22人の教職員が参加した。

はじめに玉川大学では、「それぞれの学生が、朝の8時半から夜の9時ぐらいまで、休憩時間を取りながら、1日8時間は学内で過ごせる」しくみ作りに取り組み、図書館の2フロアを学生が学習に使いやすいラーニング・コモンズとして整備するとともに、授業の時間割についても、連続授業の履修を避け、授業前後に学生が予習・復習を仲間とともにできる環境作りに力を入れるなど、全学的なFD活動が実践されていることが紹介された。

講習会の前半は、アクティブ・ラーニングに関する基礎知識の講演であり、近年話題となり、様々

な定義が用いられているアクティブ・ラーニングについて、最近の大学教育業界では、「学生が授業を聴くだけでなく、授業の中で頭を働かせて、分析、総合、評価などのスキルを磨きながら、自らの考えを外にむけて発信していく「認知プロセスの外在化」作業が含まれる学習である。」と定義されることが一般的であること、また現代の初等・中等教育の中でもアクティブ・ラーニングが推奨されはじめ、近い将来、アクティブ・ラーニング形式で学んできた学生が増加する一方、おそらくその経験の違いから、今以上にこの学習方法の受け入れに大差がつくことが予想されることなどが概説された。

またアクティブ・ラーニングの形式をとった授業の中には、学生が活動しているようにみえても学習やスキルの向上につながらない場合もあることが紹介され、アクティブな形態を取り入れる際に、主体的に知識を統合させられるような深く質の高い学びにつなげるためには、授業課題の組み立て方などに工夫をする必要があることが強調された。

具体的な1つの方法として、知識、理解、応用、分析、統合、評価の6つの学習レベルを設定し、それぞれのレベルで、その目標にあったアクティブ・ラーニングの代表的な手法が紹介された。その中でも特に重要となるのが、「応用」のレベルにおけるグループディスカッションにおいて、フリートalkingにするのではなく、学生のレベルにあわせて、ある程度構造化し、課題や役割を明確にするなどの指示が必要となること、また「分析」のレベルにおいて、授業内容や資料を文章で要約するのではなく、グループごと、それぞれの視点から図としてまとめさせる、「コンセプト・マップ」の活用方法など、コミュニケーションのスキルが高くない場合の配慮方法などが具体的に紹介された。

後半は、実際にアクティブ・ラーニングを意識

した授業計画（概要、到達目標、活動・指示内容、留意点など）をたて、その計画を4人グループで教員同士見直し、よりよいものへアイデアを出し合うという体験学習が行われた。参加者の多くは日頃からアクティブ・ラーニングを意識していることもあり、10分程度で指示されたワークシートを埋めて議論にのぞんでいたが、多くのグループで、ディスカッションの中に、グループ作業が苦手な学生、配慮の必要な学生をいかに、どこまでグループ作業のあるアクティブ・ラーニングに参加させられるかが課題となっていた。

ディスカッション後の質疑では、①学生全員参加を目指す工夫について質問が出たが、グループを固定しないこと、予習・復習をしてこない学生でも、当日の授業内容や資料で参加できるテーマや課題を利用することなど、本学の教員がすでに実践しているのと同様の方法しか現状の対策にないことが説明された。

また、②近年の学生の論理性の不足などのスキル不足を補う方法についての質問については、ディスカッションの前に、意見とその根拠を書き出す「ワークシート」などを活用し、意見とともにその根拠をグループで話し合えるような仕組みを作ることなどが紹介された。

最後に、③グループ作業を苦手とする学生への配慮や対応に関する質問は、最も参加者のニーズが高かった質問であるが、この課題についてはまた玉川大学でもまだ対策が不十分であるとの報告だった。そしてこの対策に対しては、事前に苦手な学生の把握につとめるとともに、教員一人が1つの授業で対応するのではなく、TAや先輩学生をトレーニングし、積極的にサポートスタッフとして協力を得る方法など、大学、学科システムの中で対応する必要性が提案された。

研修会当日は、全国的に猛暑で蒸し暑く、授業後という疲労感が高まる時間帯であったにもかかわらず、参加者はみな、他学科教員と授業開発と本学における工夫について熱心に議論していたこ

とが印象的であった。また本学ではアクティブ・ラーニングに対し、積極的な議論はなされていないものの、平素から、様々なタイプの学生に対し、それぞれの学科の教員が、様々な工夫を重ねていることを改めて確認され、本学の今後の課題を共有できる良い機会となっていた。

（文責：長谷川恵美子 [はせがわ・えみこ] 聖学院大学人間福祉学部人間福祉学科准教授）